

魔法少女まどか☆マギカ
Web サンプル
と
チーズケーキ

inspired from

魔法少女まどか☆マギカ



戦乱の時代がきた。

長らく続いた魔法少女暗黒の時代は過ぎ去った。
彼女たちを必ず闇の先へと導くルールは、
既に今はなくなった。

だが

魔法少女達の戦いは、それで終わったわけではなかった。

魔法少女、それはすなわち夢と希望の象徴である。

だが、彼女達はまた、戦乱の中にのみ己の生を見出す戦士となる宿命を受け入れた者なのだ。

ほんの少しの希望と引き替えに、人ならぬ者として、戦い続ける宿命。

踏みとどまればそこに待っているのは、死か安らかな消滅だ。

だから彼女たちは、

ある者は自分の存在意義をかけ、孤高に生き、人知れず消えていった。

ある者は自らの魂の糧を得るため、お互いに反目し合い、生存競争の闇に陥っていった。

そしてある者達は、お互いの心を守るため、協力し、立ち向かうことを選んだ。

この物語は、そんな魔法少女達とその絶望の日々から、新たな、そして小さな希望を見出す物語である。

魔法少女
PUELLA MAGI
MADOKA
MAGIKA

まどかマギカ

フロマージュとチーズケーキ

暗闇。

この場所に潜んでいると、周りはほとんど何も見えない。手元のGPSはここがろうじて見滝原市であることを示している。

ここはいつ廃棄されたのだろうか。ほむらが——魔法少女としてでなく、人間として——生を受けたときにはすでにこの状態であった記憶がある。

暁美ほむらは廃工場の構造物に身を隠していた。キュウベエは、ほむらの肩から乗り移ると構造物上部へ顔を出して辺りをうかがった。

キュウベエはすこし空気を吸い込むような動作をした。実際には彼は空気呼吸をしない。彼の動作に興味づけをするのは我々人間だ。そんなことを考えているとほむらの頭の中に佐倉杏子の声が聞こえてきた。

「どうだい？」

十メートル以上離れているのに、つぶやきが鮮明に聞こえるのはテレパシーのおかげだ。

ほむらは頭上のキュウベえを見上げた。彼の背中の不思議な模様がかすかに見える暗さだ。だが、一見猫のように見えるその容姿が既存生物と違うのだと思わせる決定的違い、耳から伸びた長い毛、それをを守るように浮かんでいるリング。そのリングがかすかに光ったようにほむらには思えた。頭上は風がかなりあるようで、リングの反射光がほむらの目に入る位置にかざり毛がなびいている。

彼は言った。

「間違いないね……強い気配を感じるよ」

やはり会話は頭へ直接響いてくる。しかし、キュウベえに聞いている言えはそれは通常時から……彼は発声器官を持っていない。常々いちいち音を発してコミュニケーションをとらなければならぬ人間は不便な動物だと言っていた。

彼は淡々とした口調を送ってきた。

「五体、いやもしかしたら五体以上いるかもしれない。これは以外と大きな『捕り物』になるかもしれないね」

そう言い終わると、キュウベえは、暁美ほむらの肩に戻ってきた。魔獣に悟られないように、慎重に。

巴マミの声を頭を感じた。

彼女と佐倉杏子はこの先の朽ち果てようとしている管理棟の屋上にいるはずだ。

「では、いつもの手筈で……」

彼女はリーダーとしては少々頼りないところがある、と、ほむらは思っていた。だから、『いつもの手筈』を、承諾の言葉の代わりに具体的に確認した。

「まず私が不意打ちで遠距離から攻撃を。一体、できれば二体……少なくともダメージを」

「巴マミは、ほむらの配慮がわかっているのかいないのか、やはり『いつもの手筈』の確認を続けた。

「相手がひるんだところで、私が弾幕を張りつつ進路を、ね」

正直に言うと、彼女は戦闘能力も高いし、魔力自体もとても強い。だがその源泉は彼女自身の生存への渴望から生まれたのであって本来の気質とはかけ離れている。故に、その状態を維持するため、彼女は常に緊張を強らされていて、その緊張が維持できなくなった瞬間、隙が生まれやすいことを、ほむらは誰よりも知っていた。だから、そういうときにお互いの欠点を補い合える今のチームによる戦いは、入手したキューブが分配になることをさし引いてもベストに近い。ただ一点を除けば……

「ダメージを食らったやつをこの槍で片っ端から……回復は頼んだぜ、さや……」

そこまで言って佐倉杏子は絶句した。戦士にして回復魔法の使い手、美樹さやか。彼女が円環の理に導かれてからまだそ

れほどは時間がたっていない。彼女自体の戦闘力はさほど強くはないが、なにより彼女はムードメーカーであり、チームの心の支えであった。どんなときでも笑顔とジョークを欠かさない彼女の存在の大きさを他の誰よりも佐倉杏子は知っている。

「佐倉杏子……」

ほむらは呟いた。彼女はもういないのだと思うと、一番仲がよく、そして信頼を置いていた佐倉杏子になんと言って慰めるべきなのか……

「回復魔法なら」

「巴マミが、その沈滞した空気を破って言った。

「回復魔法なら、私でも、少しは使えるから、ね」

巴マミは天然なんだろうか、と、ほむらは思った。佐倉杏子が沈黙している理由はそういうことじゃない。

でも、きつと天然ではないのだろう。なぜなら施術距離はともかく、回復力だけみれば、マミの方が実際は美樹さやかよりもかなり強い。事実、チームがああ、美樹さやかがコンサートホールへ向かう魔獣と相打ちになった夜以降も、きちんと機能してきたことを考えると、その助言自体は間違っていないのは明らかだ。彼女はきつと直接あのことに触れるのを避ける為にわざとピントの外れたことを言ったのだなとほむらは思った。そう考えると、マミのピントのずれた励ましが実はバ心津がないのがよくわかった。そして、その思いは佐倉杏子にも伝わっているだろう。だが、陰鬱な思い出を翻すには私たちはまだ若すぎた。だから佐倉杏子は返事をしないのではないか？

それは本当は一瞬なのだろうけど、長い沈黙だった。

沈黙を破ったのは例によってキュウベえだった。

「……………」

無情にも開演の時刻が迫っていた。

廃工場は突如として出現したピンク色の魔方阵にその全容を表す。

四体の魔獣は、かつて出荷のためトラックが列をなしてその順番を待っていた、トラックヤード前の広場をのそのそと正門——それは市の中心部へ向いている——へ歩いている。

ちようど魔獣の背後にある、廃タンク横の管理棟上空から無数の黄色い光の弾丸が突然現れ、魔獣の足下を打ち抜く。と同時にあたかもただの照明弾であったかのような、鈍く輝く魔方阵からもピンク色に輝く無数の矢が魔獣達に降り注ぐ。

この期に及んで魔獣達は自分たちがどのような状況下にいるかを理解する。

だが、疾風のように駆けてきた魔法少女が、胸元から槍で、確実に急所を狙うのを回避するには遅すぎる。

ただそこに群れている集団と、統率のとれた集団。勝負は明らかだった。



私は思わず呟いた。

「意外に変なところにこだわりがあるのね……まどか」

ドレスのまどかが不満げに何かを言おうとしたとき、唐突にキユウベえが疑問を投げかけた。

「鹿目まどか、君に質問があるんだ」

ドレスを着たまどかが答えた。

「はい、なんででしょう、インキュベーターさん」

「一見したところ、このお茶会は同じメンバーで定期的に行われているようだね」

「そうだね、ご明察」

「しかし今回は……」

キユウベえは続けた。

「今回は普段と違う人物が混じっている……それは晧美ほむ

らと、僕だ。それはどういう理由からなんだい？ 鹿目まどか」

そう、それが私が知りたい事。なぜここに私たちは招かれているのか……

「その質問のうち……」

ドレスのまどかは続けた。

「答えが簡単な方から答えようかな」

「べえさんがなぜここに呼ばれたか、からね」

「それはすごく単純な話。ほむらちゃんと同じ座標にべえさんがいたから。本当は、ほむらちゃんだけ呼ぶつもりだったんだけど。まあ、つまり簡単に言うとおまけで呼んだってことね」

キユウベえはいつも通り無表情に答えた。

「それは大変論理的な回答だね。納得だ」



「ひん」と

「あなた！ つていうかその私！ さつきからなんだかんだ言ってるけど自分はどなの？ ひいひい泣いているばかりで、なんにも役にたつてなかったのはどこのど・なた!？」

「ひーん、あの私は悪い私です！……」

「役に立ってなかったどころか、ほむらちゃんの忠告を聞かずに、土壇場で契約して！ 世界を十日で滅ぼしちゃうなんて！ あー、もー、ぜったいほむらちゃんに嫌われてるわ！ あなただけは、な・い！ 絶対じゃないわ！」

「……う、うああああん……………**THEY ARE STAYING GOY**
NO MORE……」

あああ、まどかが魔女化し始めた！

そう思った私は急いで彼女の手をつかむと、ぎゅっと握りしめた。

「まっつて、まどかか！ それ以上いけない！」

「**SHOOT……FIGHT GET THE VIBRO……**」

だんだんまどかの姿が人に戻っていく。

そして、彼女は気分が落ち着くと半分泣きながら続けた。

「……あの、私は……魔法少女……とか、あこがれてて。暁美さんかっこいい人だなんて、転校してきたときから思っていて、そして何度も何度も助けてもらったのにお礼も言えなくて、というか、暁美さん私を避けていたし……でも私弱虫だし、何にも役に立ってないし、暁美さんも私嫌いなんだって……。でも、あの嵐の夜にキュウベえさんから力をもらって、すこしは暁美さんのお役に立ててたらしいなって……」

「まどかー」

わたしは少し大きな声を出していた。自分で驚くぐらいに……。

右隣のまどかは、完全に怒られるものだと、自分は嫌われているのだと確信して、視線を落としたまま、顔を上げることが出来なかったようだ。



「ママさんは頭をもたげかけ、私の頭に自分のほほを重ねてきた。」

「さて、では、ほむらちゃんにお聞きしましょうか」

「それはどういうお告げだったのかしら？」

「あなたは今までも、そして今でも、たくさんの人に支えられている。感謝して、その人達をできるだけ守りなさいと……」

ママさんは満面の笑みを浮かべていった。

「そう、それはとてもいいお告げね」

私は突然感情が吹き出してきた。止められなかった。

「私、これ以上大事な人たちを失いたくないんです。あのときのまどか達のように」

泣き声のような告白のあと、ママさんの体から自分を離して、じっとママさんの目を見ながら、私はこう聞いた。

「ママさんは……ママさんは私を、これからもずっと見守っていてくれますか？」

ママさんはあの時の、白いドレスのまどかに似た微笑みを浮かべて、こう言った。

「私たち魔法少女は、もはや人と異なる存在。同族はこの世界にいないわ。そして、傷ついて、いつ円環の理に導かれるのかわからない存在。だから、ずっとというのが私がまだこの世に存在している間だ、というのであれば……」

ママさんの目にもまた涙が浮かんでいた。

「答えはイエスよ」

そしてこう続けた。

「でも」

「ほむらちゃんも、もちろん一緒にいてくれるのよね」

コミックマーケット 80 頒布予定価格 500 円

2011/8/14:3 日目 (日曜日)

「とるぼら準備委員会」東地区“ム”ブロック 55a



<http://madokami.fairies.jp/>